

論文の内容の要旨

論文題目 まちづくり小集団の討議過程の分析技法
ーテキストマイニング、会話分析を援用した討議分析技法ー

氏 名 島田 昭仁

本論文は、長期間にわたるまちづくり協議会の会議録のテキストデータをより客観的(機械的)かつ継時的に縮約し、かつ誰が誰に対してどのようなタイミングで、賛成ないし反対したのかといった情報を可視化して重要な会話を明示し、それを対象とした「談話分析」や「会話分析」などの質的研究を可能にする技法(その手順)を提示することを第1の目的とする。

さらに、会話分析・談話分析を援用することにより発話間の繋がり、意味、長期にわたる討議テーマの変遷過程が明らかになり、第三者が事後的に、集団にとって有効となった目標表現を誰が行い、どのように了解されたか、誰が意見対立し、誰によってどのように解消したか、が理解できるようになり、そしてそれらを通して専門家が他の成員との相互関係の中で果たした役割を質的に解釈することが可能となる。本論は、3つのケーススタディの記述と分析を通して、専門家が果たした役割を第三者が客観的に解釈しうることを確認することを第2の目的とする。

本論は8つの章から構成され、研究の目的を第1章に、方法を第2章に示し、そしてその方法を使ったケーススタディを第3章から5章までに展開し、第6章でケーススタディを通した分析評価を行っている。そして第7章は当該技法の妥当性についての検証を行い、第8章に結論をまとめている。なお、補論として第9章を設け、第2章で示した技法についてのより詳細な手順を説明した。

第1章「研究の背景と目的」は、「コミュニティデザイン」に付与された意味が多様化し、それにもなって専門家に要請される役割も多様化してきていることを歴史的に整理し、これに伴い生じてきた研究課題について整理し、本論の目的を述べている。

第2章「当該技法の開発と手順」は、はじめに本論で提示する技法のしくみを手順に分けて概括し、次に当該技法の具体的な手順について工程ごとに説明している。同時に「グループワーク論」及び「会話分析」といった社会科学的技法から援用した技術や概念について論じている。

当該技法は、「会話分析」から援用し「ターン」（次の順番交替が来るまでの単位）というある定義を持った発話単位を扱う。そしてターン割合の変化で時期を分節化し、各分節（時期）から頻出度の高い単語を選び、その単語を含む「指標発話」とその前後のつながりを持った「指標発話連鎖会話群」を抽出する。

最初にターン割合で分節化することと、ターン割合第1位者の発話から「指標発話」を選ぶことは、ターン割合の変化が或る種の討議環境の変化を表している想定しているからであり、最終的に会話分析のような相互行為を分析することを可能にするための配慮である。

全体的に見れば、最終的に重要な発話に到着するための「テキストマイニング」を行っていると言ってよい。ただし、コンピュータソフトで行う部分と手作業で行う部分があり、後者については客観的な作業手順と判断基準が必要となる。判断の仕方は、会話分析の「連鎖」という概念を援用している。また、会話（談話）分析を行う段階になって、何に注目して解釈するのかについては、グループワーク論のアセスメント項目から援用している。

第3章から第5章までは、第2章で示した当該技法を用いて分析したケーススタディである。

当該技法は、文書データを縮約するしくみと重要な文書へ段階的に近づいていくしくみの大きく二つに分かれる。前者については縮約する中で重要なデータを落としていないか、後者については目的としたデータに着実に到着できているかが問われる。これらの点については桐生事例を分析する中で試行を繰り返し、具体的な判断基準等を構築してきたが、ここでは改めて、自ら編み出した手順にしたがってデータベースを構築し、会話・談話分析を行って結果を示した。

第4章、第5章も同じように当該技法を用いて、その具体的手順を確認するとともに、会話・談話分析を行い、意見対立の解消過程と目標の共有過程を分析した。

当該技法は多くの観察者（研究者・実務家）が会議録の情報だけで簡便に操作できる分析技法を提示したものであり、その意味で、現地の情報をほとんど持ち合わせていない観察者でも再現可能な技法でなくてはならない。筆者は第3章の桐生事例において長年参与観察を続けてきた。内部情報をほとんど持たない状況で操作可能かどうかを確かめるため第4章の小布施事例、第5章の真野事例を選んだ。また、桐生事例は住民の連帯がなかなか進まない事例であり、小布施事例と真野事例は住民の連帯が巧妙に成立していることで著名な事例である。その意味で両者を比較することにも事例選定の狙いがあった。

第6章では、3つの事例分析の比較を行っている。そして成員間の相互行為において小布施事例と真野事例にあって桐生事例にはなかった特徴を帰納的に論じている。

「リーダーシップ構造」の分析からは、3事例のいずれも発話割合の1位者が後段で交替しているとともに、その交替前後の1位者が相互に「代弁的发話行為」を通じて深く関連していることが分かった。同時にそこで、「行動目標を差配する人物」と、その「目標を実行に移す人物」との立場の逆転が生じていることも分かった。

「コミュニケーション構造」の分析からは、大きく4つ（A型：激しい対立、B型：弱い対立、C型：意見のまとめ、D型：了解）に類型化可能な特徴的な構造を紹介することができた。

同時に、「代弁的发話行為」を示す構造が特定の対話パターン（「C-2型：複数意見のとりまとめ」、「C-2型」及び「D-1型：討議の結果了解」）の直前に共通して現れることを確認することができた。また、「言説」を示す構造が共通して賛成意見へ連鎖する直前に現れることも発見した。

また、各小集団のこれらの構造的特徴の分布から、各事例の（公平かつ公正な討議環境をいかに作り出すかといった）「会議（討議）デザイン」の特質を窺い知ることができた。

すなわち、小布施事例においては早い段階で対立し、とりまとめが見られ、いわば討議慣れしたような小布施の特徴を確認することができた。

また真野事例においては、同調構造から始まり、やがて対立し争点を顕在化し、そして了解し、最後にとりまとめに至るといった特徴を見ることができ。

また桐生事例からは、初期から対立構造で始まり、かといって小布施のように「とりまとめ」構造がなかなか現れない特徴を改めて確認することができた。

会話分析から得られた知見としては、まず桐生事例からは「討議のやり取りの結果了解に至るといった構造」（D-1型）が見当たらなかったことが挙げられる。反対する意見に了解を示そうとしても反対されるケースや、指摘された成員が自ら訂正できない、すなわち、非了解志向的で、自己訂正の優先性が担保されていないことを確認した。そして「非了解志向的であること」と「自己訂正の優先性が担保されていないこと」は、代弁的发話行為の有無と深い関連を持つことも分かった。

また今回の3事例においては、意見対立の解消に寄与した非当事者の発話行為にはいずれも対立の当事者のどちらかの成員の発話を代弁する機能を有していることが分かった。

また、意見対立の解消過程も目標表現の共有化過程も局面は同じで、「代弁的发話行為」が重要な役割を果たしていることを発見した。

さらに、専門家の介入時機については、まず桐生事例では或るリーダー（「Ka」）に対して専門家が自己訂正の優先性を尊重しながらそのリーダー（「Ka」）を非難する意見の代弁的行為を行った結果、そのリーダー（「Ka」）が創造的な目標表現を行うに至った過程を会話分析から記述することができた。

小布施事例では、専門家が結果的に第三者的立場の成員の意見も受け入れて設計変更したことにより、成員の専門家への積極的な同調を引き出したことを確認できた。

真野事例では、専門家が孤立化しがちなリーダーへの批難を自分に向けさせ、そのリーダーを代弁するような形で争点を書き替えることによって、他のリーダーたちから自省的な目標表現を引き出すことができたことを確認できた。

なお、その他の成員の役割については、小布施事例において（「IZ」、「男性Y」、「男性N」といった）意見対立の当事者から少し離れた位置にいる第三者的立場の成員が「代弁機能」や「目標表現」など大きな役割を果たしたことを明らかにした。

第7章では、データの縮約過程において、意見対立の解消過程ないし目標表現の共有化過程に関わる重要な発話が落とされていなかったどうかを検証した。データ数の縮約実績については、各事例につき、いずれも開きのないデータ数となった。筆者は桐生事例には直接参与観察しているが、他の2事例は現場にいない。現場を知る・知らないに限らず、10¹レベルまで縮約できることを証明した。

また時期の分節化について、それぞれの小集団の外部環境の変化と対応していることを確認した。さらに、会議録からテーマ（論点）をすべて洗い出し、一つ一つにつき縮約過程で落としていないかを検証したところ、討議されたテーマについてはすべて網羅されていたことを確認した。

またさらに、コミュニケーション構造図で視覚的に判断して会話分析対象箇所としなかった箇所についても会話分析を行い、そこに「意見対立の対象過程」ないし「目標の共有過程」が見られないことを確認した。

第8章では、第2章の技法の提示、第3章から6章までの分析と解釈、第7章の検証を通じて、第1章で示した「目的」が果たされたことを確認するとともに、今回の研究で明らかになった諸課題を示した。